



第1位の案

本学の学部生・大学院生と学長や副学長はじめとする大学執行部との間で、大学の現状や今後のあり方について意見を交換するための懇談会が毎年2月もしくは3月に実施されています。近年は、学生と教職員との間の対話を重視した「フューチャーセッション方式」での開催が行われています。

「フューチャーセッション」とは、ヨーロッパの知識経営の現場から生まれた、地域や組織にイノベーションを生み出すための対話の場とプログラムのことを指し、その大きな特徴として、「過去にとらわれず未来志向で考える」、「各個人の個性、意見の違い（多様性）を理解し受け入れる」、「対話と協働により解決策を提案し、実行する」といった点が挙げられます。

一方徳島大学には、国立大学で唯一となるフューチャーセッションを行うための専用施設で

学生と学長との懇談会を「フューチャーセッション」形式で開催

教養教育院 准教授
北岡 和義 (きたおかかずよし)



第2位の案

あるフューチャーセンター「A・B A」が地域創生・国際交流会館内に2016年にオープンしており、フューチャーセッションを実施するには素晴らしい環境を



ワーク風景

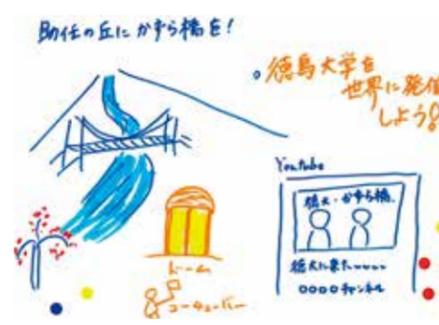
備えています。また、平成30年度より新蔵キャンパスにおいても訪れる教職員や学生のコミュニケーションを活発化させるための場として「コミュニケーション・ハブ」が設置されています。

過去に実施された対話を中心とした懇談会が参加者に好評であったことを受けて、令和元年度においても引き続き本方式を採用し、「徳島大学での理想的なキャンパス環境を実現しよう！」をテーマとして令和2年2月17日に開催されました。

フューチャーセンターA・B Aを会場として、各教育部の大学院生9名と各学部の学部生15名が、大学側から野地学長はじめ各副学長及び学務部等事務職員の13名の計37名が懇談会に参加しました。参加者はまずグループに分かれ、「ワールドカフェ」と呼ばれるテーブル間を自由に移動しながら話題を深める手法に沿って「徳

島大学の理想的なキャンパス環境とは？」というテーマで自由に語っていただきました。そしてそれぞれのテーブルで話された話題にヒントを得て、徳島大学で充実させたいキャンパス環境の内容と場所について参加者間でアイデアを出しあい、それを組み合わせ、徳島大学でのキャンパス整備の具体的なアイデアについて、学生参加者を中心として各自でイラストに起こしていただきました。

提案されたアイデアのイラストは掲示を行った上で参加者全員による投票を行い、その結果得票数の第1位は「常三島⇄蔵本間」にキャンパス間移動バス導入!!、同率第2位に「分野横断的な広い視野、教養の育成」と自覚率先、マナーの向上、「助任の丘にかざら橋を! 徳島大学を世界に発信しよう!」が選ばれました。また、野地学長に特に目を引いたアイデアについても選考していただ



第3位の案

スや電源、ネットワークなどの整備」といった方針を実現に向けて検討することとなりました。

懇談会実施後、新型コロナウイルス流行の影響によりその具体化が遅れているところもありますが、学生の皆さまの声が一日も早く私たちとなるべく検討と実施を進めていきたいと思います。

Tokudai NEWS 徳大ニュース

医歯薬学共同利用棟の利用開始



外観(写真右)とエントランス

病院前駐車場西側に建築を進めていた医学部棟と歯学部棟を結び3階建ての連絡棟「医歯薬学共同利用棟」が完成し、4月1日から利用を開始しました。

西側(図書館側)に医歯薬学研究部の玄関があり、そこに同研究部のシンボルマークと、「医聖ヒポクラテスの誓い」の陶板が飾ら

れています。これらは蔵本キャンパスのシンボルとして、学生の皆さんの心に残していただきたいの思いから作成しました。

この共同利用棟では、3階に病院の総合臨床研究センターが入り、2階は医歯薬学教員スペースとなります。1階北側にある多目的スペースは、愛称を学生から募集し、「すだちホール」と命名しました。また、多目的スペースの壁には、医歯薬学研究部はじめ、各学部、学科の歴史を紹介したパネル、また徳島での医学教育の源流である関斎齋を紹介したものもあり、学外の方にも蔵本キャンパスを知ってもらうための工夫が施されています。

内閣総理大臣表彰を受賞

中野晋環境防災研究センター長が、令和2年度防災功労者として内閣総理大臣表彰を受賞しました。中野教授は、「リスクマネジメント」「地域防災学」及び「沿岸域工学」を専門に先進的な研究や



教育に取り組んでいるほか、徳島県の多くの委員会等で中心的役割を担い徳島県の防災・減災対策に係る各種計画等の策定に携わるとともに、防災思想の普及や防災人材の育成でも県内の第一人者とし

て指導的な役割を果たしています。津波災害に関連する沿岸域工学のスペシャリストであり、かつ、地域における防災において重要な「自助、共助、公助」全てのバランスを持ちながら、防災思想の普及や人材育成に積極的に取り組んでおり、徳島県の防災・減災体制の整備に多大な貢献をしていることが評価されました。

生物資源産業界の農場で生産したハムを贈呈

9月3日、生物資源産業界学部生物資源産業界学科の学生が石井町役場を訪れ、小林智仁町長へ農場で生産したハムを贈呈しました。

このハムは、令和2年2月にミヤリサン製菓株式会社からご寄附いただいた豚舎(先端畜産システム開発施設)で飼育された豚を食肉加工研究室で加工したもので、豚の飼養から加工までを学生の手で行い完成した試作品の第1号です。生物生産システムコース4年次の小浦孝修さん、橋本託真さん、増田 諭さんから、独自の飼養方法や食肉加工の手順、自身の研究の内容等についてプレゼンテーションを行った後、小林町長へハムを手渡しました。小林町長からは、「チャンスは様々なところに



試作品の説明をする小浦さん



左から小林町長、小浦さん、橋本さん、増田さん



“徳大ハム”の試作品(約1.0kg)

ある。若い力を生かしてチャレンジしてほしい。」との激励の言葉をいただくとともに、試食したハムの完成度を高く評価いただきました。